IS・Gear

ソルの養子

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＩＳ学園には特別な教師がいる

ある者は彼は炎を自在に操るという。

ある者は彼を暴力の化身と呼ぶ。

ある者は彼をいつか絶対にぶちのめすと言う。

彼とその周りの者達の織り成す新たなＩＳの物語。

目　次

第1話　そして太陽は登る　――　1
第2話　動き出す歯車　――　12

第1話　そして太陽は登る

２１世紀末。
人類は「法力」と呼ばれる無限のエネルギーの理論化に成功。
エネルギー問題は一気に解消された。
しかし、人類は叡智は得ても愚かさは捨てられず、そのエネルギー技術は軍事利用されてしまう。
そんな情勢下、「あの男」と呼ばれる人物によってある男は人体実験を施され、初の「生体兵器ＧＥＡＲ」へと改造されてしまう。
時の権力者は次々と「生体兵器ＧＥＡＲ」を量産していき、世界を掌握していった。
通常は意思を持たない生体兵器ＧＥＡＲ。
だが突如、意思を持つ個体が出現。
「ジャスティス」と呼ばれるその個体は他のＧＥＡＲを統率し、人類に対して宣戦布告した。
ＧＥＡＲ達は瞬く間に人類を駆逐し、人類とＧＥＡＲによる１００年にわたる長き混乱――「聖戦」の時代を迎えた。

聖戦末期。滅亡の危機に瀕していた人類は、対ＧＥＡＲ戦に特価した精鋭部隊「聖騎士団」を結成。
彼らの活躍によって戦局は逆転。
ＧＥＡＲは次第に討伐されていく。
そして２１７５年。聖騎士団の活躍により、ついに元凶であったジャスティスを討伐、封印。
長きに渡る聖戦は辛くも人類の勝利によって幕を閉じた。

――はずだった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「ヤバい！入学式から遅れちまう!!」
そう言いながら走るこの男は織斑一夏
今日から新生活、世界中でただ一箇所、ＩＳについて学べる学校、ＩＳ学園へと通う事になったのが三ヶ月ほど前。
色々紆余曲折を経て、いよいよ今日は入学式当日なのだ。

「あークソッ！昨日夜更かしして通話なんてするもんじゃあなかった!!」
中学時代の友達と昨日が最後だから、と通話を開いたのは良いものの、変に盛りあがってしまって夜遅くまで起きていたのだ。
「おーい兄ちゃん！急いでんなら乗ってくか？」
そんな一夏にも救いの手は舞い降りる。
人の良さそうな顔の青年がワゴンの運転席から顔を覗かせこちらに呼びかけてくれているのだ。
勿論、そんな魅力的な提案に乗っからない一夏ではなく
「良いんですか!?お願いします!!」
まんまとワゴンに乗ってしまったのが運の尽きだった。
ワゴンの扉を閉めるやいなや自動でドアの鍵がかかる。
「ごめんねぇ、君に恨みがある訳じゃあないんだけどしばらくの間大人しくしててくれるかなぁ？暴れたり騒いだりしなければ危害は加えないって約束するからさ」
人の良さそうな青年の言葉で一夏も気付く。
これは誘拐なのだと。
車は人通りの無い狭い道へと進んでいく。
「あ、あの…ど、どうして俺なんかを…？」

「ん?·どうしてだって?君は本当に自分の価値がわかっているのかい?」
ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉
それは女性にしか動かせない「筈」の物だった。
しかし一夏は、一夏だけは、何故か男性なのにも関わらずＩＳを動かす事が出来たのだ。
「そうだね…少し昔話をしよう。」
青年はそう言うと話を始める
「むかしむかし、ある所に男がいました。男には兄がおり、男は兄を尊敬していました。ある時、ある物体が開発された事により男女間のパワーバランスが崩れてしまいました。」
「それって…」
ＩＳが発表され、今の世は男卑女尊の風潮だ。
肩身が狭い思いをする男性は沢山いる。
「さて、男の兄は毎日のように繰り返される女性からの嫌がらせに耐えながらも頑張って仕事をこなしていましたが、ある日不幸にも女性の運転する車に撥ねられてしまいました。」
「ま、まさか…」

そこまで聞いて一夏も何かに気付き、顔の色を青くしていく
やめてくれ、やめろ、聞かせないでくれ
その先の結末が自分の想像通りのものだとすれば――
「だったらどうした、クズが」
その声と同時にワゴンの後部座席のドアが剥がれ飛ぶ。
「「は？」」
音と衝撃に意識を奪われた二人は剥がれ飛んだドアの方を見る。
そこに居たのは赤いバイクのような何かに跨る男だった。
筋肉質な体型に赤いジャケットを羽織り黒のインナーを着た男が。
白のジーンズに赤い前垂れ、腰のバックルと額のヘッドギアには何か文字が刻まれている。
額の赤いヘッドギアには「Ｒｏｃｋ　Ｙｏｕ」
腰の銀のバックルには「ＦＲＥＥ」
初めて見るその男に一夏は、そして運転席の青年も、言葉を失った。
「だったらどうしたって言ってんだ、ボケが。それとも何だ？ビビって言葉も出ねえのか？」
「なっ…！何者だお前！」

狼狽え、声を荒らげる青年を気にも留めず、男は一夏の胸ぐらを掴み男の脚の間に無造作に置いた。
「落ちたら怪我じゃ済まねぇぞ、しっかり掴まっておけ」
「え？あ、は、はい！」
一夏にそれだけ言うと男は車の方を見、
「何者かって聞いてたな？」
右の拳を振り上げ
「元科学者の」
車の助手席側のドアへと叩きつける。
車は壁へと叩きつけられ、運転席では強い衝撃を検知したからかエアバッグが作動していた。
「現教師サマだ。」

第１話
そして太陽は登る

「ちょっ…だ、大丈夫ですか!?」

先程まで誘拐されていたというのに青年の心配をする一夏
「放っておけ、どのみち気絶して聞こえちゃいねぇだろうがな。」
そんな事より、と男がバイクのスロットルを絞りながら左手で一夏の頭を叩く
「テメェは自分の価値がわかってねぇのかボケが！今時の小学生ですら引っかからないような手段で誘拐されやがって…」
「し、仕方ないじゃないですか！い、急いでたんだし…」
「チッ…だったら急がなくていい努力をしろ。」
男の纏う雰囲気がどんどん悪くなっている事に気付いた一夏は（自分のせいだが）話を逸らすことにした
「あ、そ、そういえば名前！名前聞いてませんでした！俺は織斑一夏って言います！」
男は軽く舌打ちをするとただ一言こう言った
「ソルだ」
これが、織斑一夏とソル、ソル＝バッドガイの出会いである。
「口を閉じてろ、舌ァ噛むぞ」
「えっ？」
その日、この街の警察には法定速度なんて知らんと言わんばかりの速度のバイクとそれに乗せられた悲鳴をあげる一夏が目撃された事による拉致事件ではないかという通

報が多数寄せられたという。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

男、ソルの助力により無事駅に到着した一夏は、なんとかＩＳ学園の入学式に間に合った。

そして、入学式が終わりクラスへと向かう一夏。

しかしそこは

（い、居心地悪い…）

それも当然であろう、周りにいるのは女性、女性、女性だけ、と男は一夏だけなのだから。

もうここで一度寝てしまおうかと思っている所に担任であろう女性教師が入ってくる。

名前はどうやら山田真耶と言うらしくクラスで自己紹介をする流れになっているらしい。

らしいというのは既にこの時意識を半分手放していた事により話の内容が頭に入ってきていないからである。

「――むらくん?·織斑一夏君?·」

「は、はい!!」

どうやら自己紹介が自分の番まで回ってきていたらしく、それで呼ばれたようだった。
「お、織斑、一夏です！」
それだけ言って席につこうとするが
（な、なんだ…周りから無言の圧を感じる…）
周りの女性は織斑一夏という男性に対して過度な期待をしていた。
それも無理はない。
彼は世界で唯一の男性ＩＳ操縦者、自分達よりも遥かに特別な存在なのだ。
故に彼をただの一人の男性として見る人間は少ない。
しかし彼は周りの視線に耐え
「以上です！」
着席した。
「まともな挨拶一つできんのか、馬鹿者。」
パァンという音が響き一夏は頭を抑える。
顔を上げるとそこに居たのは一夏の実の姉、織斑千冬がいた。
「げぇっ！関羽！」
「誰が三国志の英雄だ。」

もう一度パァンという音が響き、教室には静寂が広がる。
千冬が教壇に立ち、生徒達へ向き直り口を開く
「新入生諸君、私が担任の織斑千冬だ。私の仕事は諸君を１年で使い物になるＩＳ操縦者に育てることだ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は十五歳を十六歳までに鍛えぬくことだ。逆らっても構わんが、私の言うことは絶対に聞け。いいな？」
一瞬の空白の後、黄色い悲鳴があがる。
「全く…毎年わざとこういった奴らをクラスに入れているのか…？」
ボヤく千冬の横で真耶が苦笑いをする。
「仕方ありませんよ、織斑先生はあのブリュンヒルデなんですから。」
「全く苦労させてくれる…それより山田先生、もう１人の奴はまだ来てないのか？」
「ああ！そういえば!!」
思い出したように焦った顔をする真耶
その様子を見て額に手を当てやれやれといった様子の千冬
「この期に及んでサボった訳ではあるまいな…」
「そ、そんな事は無いと思いますよ…？た、多分…」
「とりあえず、だ…静まれ馬鹿「やかましいぞボケ共が!!」」

教室の扉を砕くのでは無いかと思う程の勢いで開き入ってくる男がいた。
教室がシンと静まる。
その中でただ1人、彼を見た途端立ち上がり大声を上げる一夏は
「あああっ!!あんたは!!」
「やかましいっつったのが聞こえなかったのか？焼くぞ？」
「す、すいませんでした…」
ドスの効いた声に気圧されて静かに着席をした。
「悪ィな、遅れた。」
「貴様という奴は…まあいい、自己紹介だけは済ませておけ。」
「ハァ…めんどくせぇ…」
教壇に立ち、生徒全員へと向き直ったソルはただ一言
「授業だけは黙って受けろ。」
千冬とは別の方向への独裁宣言をし、教壇から降りる。
波乱の学園生活の幕が、今上がる

第２話　動き出す歯車

入学式から数日が経過したＩＳ学園、一年一組の内情はお世辞にも良いとは言えなかった。

まず第一に織斑一夏とイギリス代表候補生、セシリア・オルコットとの間に生まれた摩擦による雰囲気の悪さ。

そして、それに付随するように生まれたセシリア、及び一部生徒のソルに対する態度の悪さである。

何故ソルに対する態度が悪いか。

それは、少し時間を遡る。

第２話

動き出す歯車

その日はクラス代表を決める話し合いをしていた。

不幸にもと言うべきか当然と言うべきか一夏はクラス代表へと推薦されてしまう。

しかしその選出について反対意見を挙げた生徒がいた。

それこそがセシリア・オルコット、イギリス代表候補生である。

「このような選出、納得がいきませんわ！」
そしてそこからは今までに溜まったのであろうストレスを全て吐き出すかの如く愚痴を言い始める。
しまいには日本そのものを馬鹿にしだしたセシリアに一夏も黙ってはいれなくなったのか
「イギリスだってたいしたお国自慢無いだろ。何年不味いメシグランプリ優勝だよ…」
とボヤいてしまう。
それを聞き逃すセシリアでは無く、二人の間には一触即発の雰囲気が漂い始める。
その様子を見ていた真耶は慌て始めるも、その横で見ている千冬は悪い笑みを浮かべている。
その理由というのは簡単だ。
千冬の横にいる男、ソルの纏う雰囲気がどんどんと悪い方向へと進んでいるからである。
そぅら火山の噴火まであと数秒だ。
そう察知した千冬は真耶の肩を叩き、ソルの方を指さし耳を塞ぐジェスチャーをした。
それを見た真耶はハッとした顔になり、顔を青くしながらも大人しく耳を塞ぐ。

火山の噴火は教師二人が耳を塞ぎきった瞬間だった。
「いい加減にしやがれ!!痴話喧嘩がしてぇなら休み時間にしやがれこのボケが!!」
ソルの怒号に生徒達は完全に静まり返るが、それも一瞬
セシリアは一夏の方を指差し
「しかしこの男は私の祖国を!」
「んなっ!お前だって!」
「俺の言葉の意味が理解出来てねぇみたいだな…」
一歩、また一歩とセシリアと一夏の方へとゆっくり歩み寄っていくソル
流石にこれはまずいと思ったのか二人とも口を噤み、ソルの方へとゆっくり向き直る。
「なんだよ、やれば出来るじゃあねぇか。」
そんな様子を見て満足したのかソルは教壇の方へと戻っていく。
「よくわからんがテメェらの言いたい事はまあわかった。決闘がしてぇってんなら舞台の用意くらいはしてやる、そこでケリをつけるんだな。」
ソルは目で千冬に可能かどうか訊ねる。
千冬は頷きながら口を開く。
「そういう訳だ、オルコット、織斑の両名による決闘でクラス代表を決定させてもらう。

異論は無いな？」
「ありませんわ！」
「ああいいぜ上等だ！ハンデはどのくらい付ける？」
「まぁ！あれだけ威勢のいい事を言っておいてもうハンデを要求するんですの？」
「いや、俺がどのくらいつければいいのかなって…」
一夏のその発言がクラスのほぼ全員に笑いを誘う。
勿論、教師の千冬、真耶、そしてソルは笑ってはいなかったが。
いや、正確にはソルも千冬も笑ってはいた。
ただし、生徒達とは違う意味の笑みを口元に浮かべていただけなのだが。
「日本の…殿方は…ジョークセンスだけは…一流ですのね…」
笑いすぎで途切れ途切れになりながら一夏を褒めるセシリア
無論、そのように褒められても欠片も嬉しくない一夏
周りの生徒達は一夏に今からでも遅くないから、とセシリアにハンデを貰う事を提案するも
「いらない、対等な条件で俺はセシリアを叩き潰す！」
「織斑君、流石にそれは厳しいってば～」
「ククッ…クッ…クハハハハハ!!」

何が面白いのか遂にソルまでもが笑い声をあげ始める
「ほら、ソル先生だって笑ってるじゃん！ハンデを貰いなって！」
「何勘違いしてんだ？」
女子生徒の発言に対してソルは訂正を入れる。
「俺が笑ってんのはな、対等な力を手にした男の前でそんな事言えるテメェ等が滑稽だから笑ってんだ。」
教室が静まり返る
「確かにＩＳは強力だ、強力過ぎてＩＳが使えねぇ俺じゃあ簡単に勝つとはいかねぇだろうよ。けどな、それはあくまで俺とＩＳを比べた場合の話だ。女は男より強いだ？寝言は寝て言え、強い奴が強い。ただそれだけの話だろうがよ。違うか？」
ソルは一夏を親指で指差しながら続ける。
「コイツはテメェ等にしか使えねぇＩＳが使えるからここに居る。それはテメェ等と同じ土俵に立って、対等に殴り合えるって事じゃあねぇのか？それこそコイツが学園最強、なんなら世界最強になるかもしれねぇんだ。それが理解出来ない程の頭じゃあねぇと思うがな？」
それだけ言うとソルは腕を組み教室の壁にもたれかかる。
静まり返った教室に、千冬の声が響く。

「決闘は来週のこの時間を使って行う。以上だ。質問は？」
「織斑先生、一つだけよろしいですか？」
そう言って挙手をしたのはセシリアだった。
「何故このような殿方がこの学園の教師をしていらっしゃるのですか？特別頭が良くてもＩＳについての理解が無ければ教師として成り立たないと思いますわ。」
セシリアのその発言に「確かに。」と頷く生徒達
しかし千冬はキッパリと言い放った。
「貴様らに口で言っても理解出来んだろうが一つだけ言っておく事がある。バッドガイ先生がＩＳの操縦が出来てしまったら私なんて目じゃないほどの人間だ。それこそ、ブリュンヒルデの座なんて簡単に獲る程にな。」
勿論適切云々の問題で操作性が悪かったら怪しいかもしれんがな。と話を締める千冬。
その発言を聞いた生徒達には動揺が走っていた。
あのブリュンヒルデが認める程の存在がソル＝バッドガイなのか。
そして同時にもう一つ、生徒達は大きな勘違いをしていた。
人間では、ソルでは、決してＩＳに勝てないのだと。
生徒達のソルを見る目が変わったのはその日からだった。

にも関わらずその次の日からソルの請け負う授業での一部生徒の態度は中々に酷かった。

何故か。

理由は簡単だ

昨日の話の中で、ソル自身がＩＳを使えないという事が発覚したからである。

この話を聞いた一部生徒達は「ＩＳを操る事すら出来ない人間の座学など聞くだけ無駄である」と判断したのか思い思いの行動を取るようになったのだ。

ただし、ソルに怒られるのは怖いので本人にはバレないようこっそりと、だが。

ソル自体はそれに気付いていたが何も言わなかった。

言うだけ他の生徒の時間が削れるのだ、まともに授業を受けないで成績が悪くなるのは自己責任。そういうスタイルを取るのがソル流の授業だった。

勿論、質問を受けつけない訳では無い。聞かれた事にはキチンと答え、悩みがなくなるまで導くのでソルの授業自体はやる気があればかなり良いものなのだ。

本人はとても面倒そうにしているが。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

勤務時間が終わり、自室でお気に入りのレコードをかけるのが生き甲斐と言っても過

言ではない生活をしているソル
そんな彼が今日だけは自室でレコードをかけていなかった。
それは何故か。
レコードが1枚無い事に気付いたからである。
舌打ちをし、ソルは部屋の壁に立てかけてある巨大なジッポライターのような剣を左手で持ち、突然部屋の天井へと振り上げた。
「ちょっと先生！いくらなんでも危なすぎません？」
「何モンだテメェ」
「酷い！」
振り上げた剣は天井を貫き人を部屋へと落とした。
落としたといっても落ちてきた本人は猫のように慌てず騒がず着地しているのだが。
「何だ？最近の生徒会長サマはニンジャの真似事でもするようになったのか？更識楯無」
落ちてきた人物を睨みつけながら天井を貫いた剣を担ぐソル
「いやぁ、私もソル先生に興味が湧いてきたのでちょっと私生活の観察をしたいな～って」
手に持った扇子で口元を隠しながら飄々とした様子でそう答える彼女はＩＳ学園の

生徒会長、更識楯無である。
　扇子には「視察」と書かれていた。
「ケッ、どうせ嘘をつくならもう少しマトモな嘘をつきやがれ。ストーカー行為で訴えるぞ。」
「先生こそ、それ銃刀法違反もいい所じゃあ無いんですかぁ？」
「俺ァ良いんだよ、俺が許してる。」
「じゃあ私も良いですね、私が許してるので！」
「チッ…テメェとの会話ほど無意味な物はねぇ。失せろ」
　ああ言えばこう言う、彼女はソルのあまり得意ではないタイプの人間なのだ。
「はぁ～い、お邪魔しました～！」
「チッ、ウザってぇ…」
　部屋の扉が閉まるのを見届け、いい加減気分転換にレコードでもかけようとしてソルの手が止まる。
　普段レコードを保管している所に扇子が一つ、挟まっていたのだ。
「…クソが。」
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
　翌日、生徒会室

「来てやったぞ、エセ忍者」
生徒会室の扉をバカデカい音を立てながら開けるソル
ちなみに今は授業終了後だが勤務時間中なので白衣姿だ。
これには理由があり、千冬から
「せめて勤務時間中だけでいいからもう少し教師らしい格好をしてくれ。」
と言われた為に仕方無く着ているものだ。
「は～い、お待ちしてました～！」
先日のエセ忍者、もとい生徒会長の楯無が奥の席から手招きをする。
「御託はいい、何の用だエセ忍者。大した理由じゃねぇなら帰るぞ。」
部屋に残された扇子を楯無へぶっきらぼうに投げつけながらドカッとソファに腰掛けるソル
「じゃあまずは「テメェが俺の事を監視してんのはもうわかってんだ、余計な事は言わないで本質だけを手早く話せ」はぁい…」
せっかく用意した「監視」の文字付きの扇子が使えなかったからだろうか、悲しげな顔で「無念」と書かれた扇子を広げる楯無。
テメェは一体何パターンの扇子を持ち歩いてんだ。と突っ込みたくなったが突っ込んでしまったら長引きそうな事を理解しているソルはグッとその言葉を飲み込んだ。

「単刀直入に言います。貴方、何者？」
　真剣な顔付きになった楯無の口から紡がれたのはソルという存在についての質問だった。
「貴方についてここ数日調べさせてもらったわ。でもね、私の情報網をもってしても【ソル＝バッドガイ】に関する情報はただ一つを除いて存在しなかった。これは異常な事よ。」
「あぁ？たかが学生が調べられる情報量なんてたかが―」
「私が対暗部用暗部の一族だとしてもそんな事が言える？」
「チッ、それで？何が言いてぇんだテメェは」
　心底うんざりしたような顔をしたソルは悪態を吐きながらも会話を続ける。
「貴方のこれまでを話してくれるかしら？内容次第では私もこれ以上の接触は控えるわ」
「はいそうですかと素直に俺が答えない可能性を考えなかったのか？暗部サンよ」
「もしそう仰るのであれば実力行使も辞さないですけど？」
「ウザってぇ…　いっぺんヤキ入れなきゃわかんねぇか？このクソガキ」
　互いに臨戦態勢へと入っていく。
　と、その瞬間にソルの白衣のポケットからヘヴィでロックな電話の呼び出し音が鳴

る。

通話ボタンを押し、スピーカーモードにする。

「チッ、俺だ」

「俺だ。じゃない！貴様今どこにいる！とっくに約束の時間は過ぎているぞ！」

電話の相手は織斑千冬だった。

「そうか、じゃあ今から向かう。じゃあな」

それだけ言うと終話ボタンを押し携帯を仕舞う。

「・・・　約束って？」

「あ？なんでテメェに話さなきゃなんねぇんだ。これ以上遅れるとうるせぇから俺はもう行くぞ」

そういうとソルは面倒そうにソファから立ち上がり生徒会室から出ていった。

「あっ」

突然の終わりに楯無は数秒放心していた。